

第3回学識者懇談会（議事録）

2007年12月21日 10:00～12:00

福岡建設会館 7階会議室

1. 開会

事務局：資料確認・委員紹介

2. 国土交通省あいさつ

3. 議事

(1) キックオフレポートの構成等について

(2) その他

【矢田委員長】 それでは議事進行に入りたいと思います。今日は事務局から30分弱説明をいただきまして、その後、フリーディスカッションをしていきたいと思っております。

【事務局】 それでは事務局より、資料1から5を用いて説明させていただきます。まず、キックオフレポートの構成については資料2でございます。活力ある経済社会、自立的発展、生活の安全と豊かな環境を目指すそれぞれの検討小委員会の中間レポート等を踏まえまして、事務局でたたき台として作成したものでございます。

3章で構成しており、まず第1章は九州圏における現状と課題について。第1節で九州圏の位置づけと圏土構造の特徴として、東アジアに開かれた九州圏、基幹都市が適度に分散する圏土構造、産業が集積している状況、また豊かな自然等について記載しております。

第2節、経済社会情勢の転換と九州圏の課題について、併せて記述することを想定しており、グローバル化の進展と東アジアの経済発展の関係、急速な人口減少・少子高齢化、また安全・安心、環境に関する意識の高まりの関係、価値観、ライフスタイルの多様化、新たな活動主体の成長等について記載する予定であります。

次に第2章の新たな九州像について、21世紀前半における新たな発展の基本理念について記載することを想定しております。また、第2節で新たな九州像として、記載の通りの3つの項目を想定しております。また第3節では、新たな九州像を描く期間といたしまして、おおむね10年程度を想定しております。

次に第3章、新たな九州像の実現に向けた戦略と対応について、まず第1節で戦略の展開の基本的な考え方について、第2節で新たな九州像の実現に向けた戦略として、記載の通りの7項目を想定しております。こちらの戦略の基本的な考え方、またその戦略の内容につきましては、本日ご議論いただくことを想定してまとめております。資料1でございます。

まずご議論頂きたい事項として、戦略展開の基本的な考え方、九州圏の特徴を活かした戦略をどのように展開していくかということ、ご議論頂きたいと考えております。特に「九州らしさ」というところを戦略展開で分かりやすく表現していきたいと考えておりま

す。

それではその内容についてですが、九州らしい戦略展開の考え方について、まず「圏土構造」の展開の方向性についてです。具体的には資料3で、全体像を示しております。まず東アジアについて、我が国において、東アジアとの地理的近接性、歴史的なつながり、環境問題等の共通課題への対応等の面において、九州は高いポテンシャルを有している地域であると思われれます。こちらに国際交流フロンティアという部分で記載して、図表で表現してある通り、上海と東京まで約1,000キロの範囲で結ばれるという、非常に優位な地理的条件を備えており、このような関係から東アジアと我が国を結ぶ国際交流フロンティアの形成等を図っていくことが望まれていると考えられます。

また、九州圏が一体的に発展する活動として、成長型・牽引型産業が形成されております。アジアとの近接性ですとか、温暖な気候、地理的特性、労働力等の特性により、九州の各地域に特色ある産業が展開されているところであり、資料4でまとめております。これまでの産業集積等により、現行の産業群を現行アイランドとして、6個を検討しております。まずカーアイランドは、すでに自動車産業の集積がなされており、今後の展開の方向性としては、内発的産業化を促していく方向性、生産性をより一層高めていくことが考えられます。またシリコンアイランドは、基幹都市圏、県庁所在地等の近くに空港等がございますので、九州全体の基幹都市圏を中心として、産業集積が行われているところであり、半導体産業からカーエレクトロニクス等の新たな産業展開を図っていくことが必要と考えられます。また、造船業、鉄鋼、化学の産業も、これまで九州の近代化の中で集積してきた産業でございますので、オーシャンアイランド、マテリアルアイランドとして、より高度化を図っていくことが考えられます。また、農林水産業、食品産業、観光業も、九州では大変重要な産業ですので、これらを国際化や国際的な競争力という観点から、より強固なものにしていく必要があると考えられます。特にヒーリングアイランドは、現代人が求める健康と癒し等をテーマとした戦略的な展開を図っていくことが必要であると考えられます。

次に、次世代の成長期待型産業につきまして、4つのアイランドとして整理しております。まずエコアイランドは、環境・エネルギー分野の技術集積等が、公害克服等の経験により、九州圏では集積しているという状況にあります。また、バイオマス等の技術、静脈物流につきましても、具体的に形成されている地域であり、これらの分野をより一層発展させることにより、エコアイランドとして発展を目指していくことが考えられます。また、インテリジェントアイランドは、知識財産業で、特にコンテンツ産業や、ソフトウェア産業、またデザインや設計の産業は、都市的性格を有するものですから、それらの集積環境を形成することにより、インテリジェントアイランドとして発展を目指していくことが考えられます。また、ナノ・セルテックアイランドは、バイオ、LSI等の基幹分野や微細計測・加工技術の集積により、バイオですとかフラットパネル、カーエレクトロニクス等の様々な分野におきまして、新たな産業展開を図っていくための対応が考えられます。また、

ロボット・エアロスペースアイランドは、産業ロボット等の工業が集積しておりますが、それらを次世代におきましては医療・福祉等の分野において、ロボット産業が発展することが想定されますので、そのような分野を発展させるための研究開発等が考えられます。また、九州では特徴ある産業として、航空宇宙や海洋関連の分野についても、技術研究開発が進んでおり、それらを伸ばすことにより、新たな産業展開を図っていく方向性が考えられます。

次に資料1に戻って、(2)の「九州の自立」の単位の考え方についてです。九州圏は欧州中規模諸国と同程度の人口ですとか経済規模を持っており、また、我が国の1割の人口と経済規模を持っているという特徴や、都市と自然が近接しているという特徴、また中山間地域や離島、半島が多く分布しているという状況を踏まえて、そういった特徴の中で九州圏の活性化や高度な社会的サービスから日常の生活まで、戦略的に自立を促すために、九州圏では都市圏、生活圏の二層ではなくて、都市と自然との関係の、都市自然交流圏という一層を加えた三層で捉えていくことを考えております。

具体的には資料3で整理しておりますが、まず一層目の九州自立広域圏ですが、九州が一定のまとまりのある経済圏、広域自立圏として発展するための圏域として、圏域の単位としては九州全体を想定しております。また、都市の配置の状況で見ますと、九州圏には基幹都市圏がバランスよく分散されているという特徴がございます。また、これらの都市では個性と魅力を備えた多様な機能が集積しているところで、これらの個性的で魅力ある都市圏を極とした多極型圏土構造からなる九州自立広域圏の形成を図っていくことを想定しております。また、次に都市自然交流圏ですが、九州圏には高次都市機能が集積する県庁所在地等の基幹都市圏と、一定の高次都市機能の集積が見られるような拠点都市圏が、適度に分散しているという構造がございますので、これらの基幹・拠点都市圏と多自然居住地域の交流、連携による豊かな生活環境を実現するための自立圏域として、都市自然交流圏を形成していくことを想定しております。圏域の単位は、この中ほどの図にございます青色の部分が、想定している基幹・拠点都市圏のイメージで、ここから日常的に高次都市機能が享受できるような単位として60分圏、交流連携により、より拠点機能を享受できるような範囲として2時間圏を想定しております。また、基礎生活圏ですが、人口減少下にあっても、生活関連サービスを維持し、地域社会における機能や活力を確保するための自立圏域を想定しております。自立の単位としては、緑色で記載されている部分が、一定の生活支援機能がある生活中心都市を記載した部分で、こちらから30分程度の範囲内が基礎生活圏として考えられる部分であると想定しております。

また、次に(3)「広域的な対応」における展開の方向性についてですが、先ほどの特色ある基幹都市が適度に分散しているとか、都市の周辺には豊かな自然環境があるというような特性を活かして、それぞれの都市と自然を結びつけ、新たな発展を促進したり、高次都市機能・生活支援機能を充実・相互利用することにより、広範囲でこれらの機能を享受できるような生活環境を形成していくような交流連携軸の展開を想定しております。

資料3、九州自立広域圏は、先ほどの基幹都市圏を結ぶことにより、新たな発展を促すことが考えられます。また、都市自然交流圏は、流域や、内海、海洋等の関係から、拠点都市から自然地域へ交流軸を展開していくことが考えられます。また、基礎生活圏は、生活関連サービスの機能補完、新たな発展を促すための生活文化交流軸の展開、九州南部の県際交流等で例示しておりますが、これらの地域の連携により、生活関連サービスを維持していくようなことが想定されます。次にネットワーク化による対応について、九州圏には離島、半島等の地理的制約が厳しい地域が多く存在しており、基幹都市圏では多様な機能が集積しているという状況でございます。これらの状況を踏まえ、九州圏の取り組みをネットワーク化することにより広域的に展開していくことが考えられます。特に防災、医療、子育て、環境等の社会的サービスの部分については、これらを広域的にカバーすることによって、より高度な都市機能を広範にわたり享受できるような環境が形成できると考えられます。また、知的集約等を結ぶことにより、新たな発展も考えられます。また、最後に、基礎生活圏は、資料3の右下にございますが、先ほどの生活中心都市の30分圏内から外れるような中山間、離島・半島等の地域は、特に高次都市機能、一定の社会的サービスを日常生活の中で享受することが難しいため、地理的制約を克服するための対策が必要になっているところです。これらを全体として九州らしい戦略の基本的な考え方とさせていただきます。

次に戦略から想定される対応のイメージにつきまして、資料5で説明させていただきます。「7つの戦略から想定される対応のイメージ」ということで、検討小委員会のご議論を受けまして、事務局でたたき台として作成したものです。

一番目に東アジアへのフロントランナーということで、発展する九州の形成ということを挙げております。九州は有史以前から大陸の窓口であり、またその時代時代に多くの技術や文化が入ってきており、そういった時代背景の中で、今日東アジアが世界の第三の極になっていくという中で、過去の歴史背景を受けながら、東アジアへの我が国のフロントランナーとして発展すべきではないかということで、戦略として挙げております。九州は非常に東アジアと近接しており、すでにビジネス圏が形成されています。ソウル、上海等は、東京と同じ時間で行き来ができるといった状況の中で、国際交流フロンティアの形成をしていくべきであるということをおっしゃっております。また、九州には世界的な先端技術が育っており、エコタウンの取組み、このような環境問題での貢献ということもできるのではないかと、そういうことで九州発の魅力的な創造を発信していく機能の強化というのが必要ではないかと、また、併せて次世代を担う人材育成の必要性をおっしゃっております。

次に2点目として、アジア経済との一体的な発展ということで、環黄海を中心にした東アジア経済圏のさらなる拡大といった取組みが必要ではないかと、さらには圏土内におきましては、外国人を対象としたインフォメーション、開放的な圏域をつくることも重要ではないかと、また、現在の多様な取組みの事例研究や、技術研修等の取組みを示しております。

次のページに国際旅客、物流の動きの状況を示しておりますが、ここ10年で入国者が2

倍に伸びています。またコンテナ貨物についても1.8倍伸びています。また全国的に見ましても、九州のアジアへの輸出というのが、全国平均の10ポイント弱を占めて、上回っているという状況でございます。これらの状況の中で、グローバル化に対応したアイランドの形成ということで、東アジア規模での生産ネットワークをしっかりと構築していけば、九州に産業立地、企業立地等が進んでいくのではないかと、また観光地づくり、安全・安心の食品ブランド、また輸出に繋がるような製品開発、商品開発ということが必要ではないかと、また、次世代の環境やバイオ、情報分野の記載をしております。次に、九州のゲートウェイということで、福岡、北九州をはじめとした各地での拠点整備、そういった中で多地域・多頻度・多経路の連携の促進というのが重要ではないかということに記載しております。

2点目ですが、多極型圏土構造と地域連携軸の形成ということで、九州の基幹都市が分散している利点を活かした多極分散型がすでにできている中で、各拠点の特色を活かしたかたちでの拠点形成をしていく必要がある、また、産業の高度化、人材の育成といったことで、イノベーションの創出や、技術研究部門だけではなく、アジアビジネスを担うような人材の育成、また、活躍の場の創出が必要ではないかということを示しております。

次に4ページ、地域連携軸の形成ということで、九州圏の高速交通体系の整備状況は依然として東西格差があるという問題点がございます。移動の高速化、高度化をさらに推進して、フラットな高速体系を形成していくことが必要であり、そのための結節拠点ですとかシームレス化を進める必要があるとしております。また、最近の情報通信基盤の整備状況の中でも、九州は全国平均から見ますと、福岡県以外については非常に遅れているという実態がございます。また、九州内でも、南北格差や地域間格差が見られ、これらの解消が必要ですし、その技術活用能力の向上が必要となっております。

3点目でございます。災害環境ということで、九州の災害に関する状況、台風の上陸等、九州はある意味では災害等の最前線です。防災施設の整備は当然ですが、減災の視点、ソフト対策も重要です。一方で、地域の広域的なセーフティネットワークの形成が必要ということで、防災ネットワークや、水の安定供給、高度医療ネットワーク、中山間地や離島、それと高次医療施設を結ぶ高速搬送やドクターヘリ等が重要になっています。

次に、安心・安全な九州圏の形成で、九州は恵まれた多様な自然をたくさん持っており、一方では耕作放棄といった課題も持っております。こういう中で、自然環境の保全、希少生物や外来生物の対応、また人の手による取組み、多自然型川づくり等が重要、また、環境先進圏として、リデュース・リユース・リサイクルの取組み、物質循環の形成が重要と考えています。

4点目、基幹・拠点都市圏と多自然居住地域の交流連携ですが、基幹都市圏、拠点都市におきましては、高次都市機能が非常に重要でございます。一方で多自然居住地域は、癒しという素晴らしい機能を持っております。これらの交流連携が必要ということです。特に都市につきまして、高次都市機能の充実強化、快適な都市空間の形成が必要ですし、地方では、地域資源の広域連携ネットワークにより、総合力を高め都市と多自然居住地域と

の結びつきをもって、総合力をさらに発揮するという視点を書いております。

5点目の生活中心都市を核とした安心でゆとりある基礎生活圏の形成ということで、日常の生活圏の中で、都市的なサービスの享受が非常に大事で、それらの生活機能を支援するような生活中心都市を中心とした生活圏をイメージしております。そのためには、地方都市でも、中心市街地の活性化や雇用の場の創出等が重要、さらにはユニバーサルデザイン、福祉のまちづくり、それと多様な働き方や、子育てを支援した上でのワーク・ライフ・バランスが重要ではないかと考えております。

続きまして、九州の地域資源や歴史文化、地場産業、伝統産業を、複合的にさらに活性化を促進することが重要、また、農商工連携、一次産業の潜在力を引き起こすような取組みも重要ではないかと考えております。さらにはそれらを支える交通基盤、情報通信基盤の整備が重要であり、県際交流会議といった取組みもすでに見られているという状況でございます。

次に、九州の一つの特徴でございます離島・半島、中山間地域ということで、地理的制約の厳しい地域の分布を試算しておりますけれども、こういった地域において、都市的なサービスを直接享受することが厳しく、特に九州は離島が国内の約5割、有人離島数では約4割といった特徴がある中で、地理的制約を克服するための生活イノベーションの展開が非常に重要であり、特にこういう制約がある中で、内発的な産業振興を積極的に取組むために、亜熱帯や海洋性気候、また伝統文化や郷土料理といったものを活用した活性化が必要ではないかと考えられます。一方、漂着ゴミといった問題も現実に起きており、そういった静脈物流の構築も重要ではないかということで挙げさせていただいております。

最後に先導的な地域づくりの推進として、現状、九州は中国地方に次ぎ、高齢化集落が多く、消滅の可能性のある集落の割合では、10ポイントと相対的に低いといった中で、地域の制約を逆手に取り上げまして、それを越えるようなすばらしい恵まれた地域資源や文化遺産など、様々なものがございます。これらを積極的に活用し、活動していくことで、所得機会の確保や地域づくりの多様な展開に繋がっていくのではないかとということで挙げております。特に地域の担い手の育成は重要で、東京でも議論されております新たな公の活躍が期待されますが、従来の公でやっていた領域、もしくは従来の私の領域、または公と私の中間的な領域を、住民やNPO、企業団体、行政、これらが協働して地域づくりを推進していくことが必要ではないかと考えています。最後に地域の資金が地域に再投資されるといった「資金の小さな循環」の形成も重要ではないかということでまとめさせていただきました。以上でございます。

【矢田委員長】 資料2を見ていただきたいのですが、全国計画では、キーワードは自立的広域ブロックより成り立つ国土構造ということで、相当部分、ブロックの自立性を意識しております。それとアジアのゲートウェイというこの2つがキーワードになっていると思います。アジア、圏土構造、産業集積、災害あるいは恵まれた自然環境の話があって、

これらを意識しながら3つの検討小委員会を立ち上げまして、半年近く議論を頂いて、3つのレポートが出ております。

これをそのまま足すという発想ではなく、この内容をどう統合するかというのが資料2の右側です。自然環境や災害、あるいは都市形成や産業を三層の自立圏という言葉で整理する。九州圏全体の自立、アジアをにらんだ自立ということが一つのキーワードになっています。第2節の1、2、3がそれに近く、1番目がアジアとの戦略のなかで九州の産業活性化をどうするか。フロントランナーとしてアジアとの連結をどうするかということです。

もう一つは九州全体の圏土づくりをどう考えていくか。多極型圏土構造、それを地域連携軸で結びつけていく。ここから高速交通体系や通信網などがプロジェクトとして出てくるストーリーで考えております。それから基幹都市の高次サービス、必要なサービス機能を充実するという点で2番目。3番目が九州全体の自然環境の問題。1、2、3がアジアを意識しながら九州全体の自立のストーリーを展開している。

一般的にはそれで終わりますが、もう少し目線をミクロなレベルに落としていったのが、4、5、6であります。要するに基幹都市というのはイメージ的には久留米、北九州も含まれますが、県庁所在都市を意識しながら、そこを軸にする。これに10万都市あるいは20万都市ぐらいを加えて、これを基幹及び拠点都市圏というかたちでつくって、地域づくりの拠点にし、その後背地である多自然居住地域との連携による都市自然交流圏を形成する。要するに日帰りといいますか、通勤圏レベルよりもう少し上の、高次医療や高等教育など高次サービスを受けることをかなり意識した、都市自然交流圏をもう一つの自立の層として考えてみた。これが4番です。

そして5番がもう少し目線を落として、生活中心都市という、大都市、基幹・拠点都市圏以外の大体人口5万から10万ぐらいのところを核にした日常的な移動圏を基礎生活圏として、特に福祉、医療、教育文化の拠点をつくりながら后背地を結合する。そのための必要な道路整備をやっていくというストーリーです。

6番は拠点都市から1時間半以上の地理的制約が強いところの課題を抽出してどうするかということで整理しています。

災害環境ハザードというのは、1項しか立っておりませんが、そこで頂いた議論は相当程度、過疎地帯、限界集落地帯に係る指摘が多いので、4、5、6の中でも入れていくストーリーで考えております。大体他のブロックは、全国計画であります1、2、3のところ片付いております。ブロックを1つとして縦系列で説明しておりますが、縦の話とともに横、地域レベルの話をクリックしてやっております。そして7番で地域における地域づくりの方向、人材づくりというかたちを取っております。一見、この立て方が分かりにくいかもしれませんが、いわゆる九州全体の戦略は1、2、3。そしてもう少し目線を落として、特に九州は5と6がしっかりとしたストーリーがないと、福北大都市圏のところは光が当たりっぱなしで、限界集落に対応できなくなることがあるので、そういうかたちで

第2節を立体的に組んだと理解いただきたいと思います。

今日のキックオフレポートは、この構成そのもの、考え方そのものの議論を頂くので、細かい文章は入っておりません。また、これを核にして具体策としてプロジェクトを入れるということで、今回プロジェクトは議論に入れておりません。そのプロジェクトをどの棚に収めていくかという時の骨格づくりとご理解ください。このプロジェクトの収め作業が年明けで一気に始まるということで、今日は骨格の大きなところをご議論頂ければというところでございます。

具体策は第4章があるのですか。それとも、この第3章の中に入るのですか。

【事務局】 今のところ事務局で検討中ですが、戦略の項目立てに応じて、そのプロジェクトを展開することを考えております。

【矢田委員長】 ということは、たとえば空港や道路など2節の1のところ施策を入れていくということですね。

【事務局】 第3章の中でそのままを書いていくのか、第4章として新たに同じ項目で書き直すかについて、今、検討しております。

【矢田委員長】 要するにこれから作業に入るスタート台といたしますか、前半と後半、前半は各検討小委員会の相当細かい議論を繋げて、次はプロジェクトを入れる作業ということで、12月から1月あたりは、ここの議論を進めたいというのが私の理解です。ということで、自由に質問その他頂いていこうかと思っております。よろしくお願いいたします。

【荒牧委員】 今の委員長の説明で、よく分かりました。意見を述べさせてもらいたいと思いますけれども、資料1の頭のところに、戦略の基本的な考え方があります。「九州らしさ」というところで、このキーワードはさきほど先生がおっしゃったように、自立ということが一つのキーワードであるならば、「九州らしさ」というものだけではなくて、責任を伴うというふうに僕は解釈したいのです。

レポートを出させてもらった時に、例えば炭酸ガスの排出量をどれぐらい、例えば半分に規制するという状況が世界的に生まれた時に、九州がその責任を持つということを考えるべきだと私は思います、そうすると、九州自立広域圏は、先ほどの2節の1、2、3を挙げられましたけれども、それ以外にそれを覆うようなものとして、例えば炭酸ガスの排出量を50%削減した時の九州のあり方はどうなっているのか。どういう暮らしになっているのかということ全体として責任を負う。そして、その解決策は、九州全体として考えないと間に合わない。例えば福岡だけでは間に合わない。山だけでは間に合わない。だから連携、ネットワークが必要だというようなストーリーができるのではないかと思います。

それから、防衛と外交ですが、例えば防衛については、今は国と県が対応することになっています。何か事態が起こった時には、県が対応することになるけれども、そこまで責任を持つということであれば、九州自立広域圏で考えるべきだと考えます。

それから、州の単位をイメージすれば、アメリカでは州の外交が相当活発に行われているはずですが。そういう仕掛け、たぶん新たな九州の実現に向けた効果的な推進の中で語られるのかもしれませんが、その大きな対外的な外交政策課題になるだろうし、農業、食料の基地というのであれば、例えば高度な農業や付加価値の高い農業は分かりますし、それはそれぞれの地域ががんばってやる以外にないと思いますけど、もっと下のレベルの、例えばカロリーベースの農業、米や麦、それからとうもろこしや穀物類の農業はどうするのか、というところを聞かないと、これは競争だけでは絶対にやれないと認識していますので、九州レベルで、自立したかたちでやるのであればというふうに思います。

そういうイメージで、九州自立広域圏、都市自然交流圏、基礎生活圏という考え方に大賛成です。その一つ上に、もう一つ上のレベルをつけていただいた上で、この3つの単位を考えることについては、非常によく分かって理解が進むと思います。各地域で考えている有明海の問題であるとか、北部3県の連携の問題であるとか、それから山間地と都市との連携の話ということが、すごくよく分かるようになります。

そしていちばん最後に何といても気に入ったのは、いちばん下に基礎生活圏を入れていただいたところで、これは私のようにローカルな活動をしている人間にとっては、広域消防や、広域の救急、それからゴミ処理といったものが、たぶんこれに当たるのだろうと思って、ここを元気づけてやるのが、その地域の連携を励ましてあげることになるので、このいちばん下の層にこういうものをつくっていただいたことが非常におもしろい。今いろんところで議論していますが、九州州、州政府ができると、その下のいわゆる行政単位は、この基礎生活圏が直接結びついてくるのではないかというふうに理解していますので、この文章を受け取った時に非常に僕は気に入っているところです。

【片岡委員】 今、ご説明を聞いて、三層の圏域を考えているというので、私もいいなと思いました。私がいちばん関心があるのは、自立というテーマでございますので、この自立の体制づくりなどいろいろあると思いますが、どういうふうに進めていくかというところだと思うのです。その時に、地域住民や行政、あるいは産業分野で、どういうふうに進めていくのかということが、もうひとつあるといいなと感じたところです。

というのは、最近ご存じのように、地域でいろんな団体やNPOができております。これはそれぞれ地域完結型でやっているわけで、しかしこれが連携ということであれば、九州全域も考えた連携もあるのではないかと。それが実はこういうプロジェクトを進める上の支えといいますか、あるいは第一線の人たちというかたちになると思います。それはまた自立を促すひとつの大きな支援になるのではないかと考えております。従って、NPO等とは限りません。コミュニティビジネスをどう進めていくかというのも、こういった自立

の体制づくりの大きな戦力の一つとして考えていいのではないかなと感じております。

もう一つは、九州の特性のところ、九州は、コンパクトアイランドと言ってもいいぐらいに、非常にバランスの取れた地域になっていると思うのですが、やはり産業という意味では、九州には歴史性もありますので、文化遺産といった近代遺産をもう少し強調してもらいたい。実はこれも先ほど言いました自立の体制づくりと結びつくと考えます。文化遺産、産業遺産のほかに、地場産業の歴史もあります。そういうものをうまくネットワークで繋ぐことが、実は対アジアとの観光面や交流といった面とも繋がってくるので、これも九州の特徴の一つではないかと思っております。

それともう一つは、離島と中山間地域です。ここをどうするか、というのが本当に日本列島としても課題だと思えますけども、九州としても離島と中山間地域がいちばん私は関心があるところで、これとの交流ということで3つの領域を結びつけた。これは大変いいことだと思います。特にネットワークづくりですね。それとの交流を、単なる交通体系だけではなくて、文化交流とか、いろんな意味で交流をして、中山間地域をどういう舞台にしていくかということが一つの課題ではないかと思っております。

【樗木委員】 今までのお話で、ある程度私も賛同するところはあるのですが、これをさらによくするという意味で考えますと、一つはやはり自立の意味、内容をもう少しはっきりさせてほしい。日本の中で九州が自立していくということは、いったい何だろうと。さきほど防衛の話も出ましたけれども、それはそれであるのかもしれませんが、やはり経済的に自立するという趣旨が、ここでは強いだらうと思います。はたしてそれが可能なのかというと、大昔は自立だったのです。地域地域が孤立と言ったほうがいいのか、自立していた。それがだんだんお互いの交流を拡大して行って、今や国内だけではなくて、国際的にも交流して地域が生きていくというスタイルになってきたのですが、そういう中での自立とはいったい何か、ということをもう少し明確にさせていただく。三層構造にするのが自立かと言われると、私はまだもう少し詰める余地があるのかなという感じがいたしました。それが一つです。

そういう中で、国際というところを若干私なりの感想で申し上げますと、要するに国と国との関係を国際だといえ、これは九州が目指すべきことではないだろうと。制度の問題だとか、あるいはさきほどの国防の問題ということになれば、それは国際、国と国との関係であり、地方ということになれば、多くの場合は、人と人との関係。そういう意味では私は時々「民際」という言葉も使っていますが、人と人、市民と市民の「民」ですけれども、要するにそういうことを東アジアと連携する。大昔はそうだったと思うのですが、朝鮮半島にしても中国にしても、人と人の交流が中心だったと思うわけですが、それがだんだん活発化して、かつては裨を着た国際的な交流関係から、今や例えば韓国などになりますと、日常生活の中での、日常交流というようなイメージになってきます。21世紀の後半に向けて、九州が東アジアのフロントランナーになるのであれば、国際というものから

民衆への流れにもう少し視点を置きながら、自立を考えていただくと、よりよいものになるのではないかという感じを持っています。

それから、2つ目は、三層ということで、まだ理解不足なのですが、自分なりに思ったのは、まず一つは広域自立圏があって、その下に都市自然交流圏という大きな括りがある、そのさらに下に基礎生活圏。こういう姿に、縦の垂直型のイメージが浮かんでくる。もちろん、よく見ればそういうことであるのは間違いないのですが、私はどちらかというと、水平型に持っていくのがこれからの基本だと思うのです。ですから広域自立圏としてネットワークをいろいろ考えておりますが、このネットワークづくりというのは、ある意味ではこの九州の中が水平的な関係で各地域が結びつくような努力をするのが、循環型のネットワークの形成に大きな意味を持つものと思うわけです。そう考えるならば、この三層の中でも私は、真ん中の都市自然交流圏、これがいちばん大きなウエイトを占めているのであって、九州の中にそういう地域のネットワーク、交流圏をつくっていく。その時に、いちばん下の基礎生活圏というところの矢印を、上に一つ加えるだけで、もう2番目で全部尽きるような絵姿になってくるのではないかと。資料3のいちばん右側の2番目の図を見ながら話しているのですが、都市交流圏みたいなものがある、そのまた基礎生活圏の中で、自然交流圏というのをつくり上げて、それに矢印一本、いちばん下の図に加えれば、上の図で全部包括されるようなイメージというのが出てきそうだと思うわけです。ですから、三層というけれど、どちらかというと真ん中の都市と自然の大きな基軸構成の中で交流圏を形成しながら、その実現のために一番目の循環型にいたり、あるいはその中でも基礎生活圏のところを大事だという意味において、節制的に、あるいは分野的に、そこが入ってくるというような感じがしないでもない。だから三層をもう少し詰めていただきたいと思っております。

最後に一つだけ言わせていただければ、ここでは経済的なイメージ、それから安全・安心、生活というような、3つぐらいが大きなテーマで出てきておりますが、私は九州の大事なことというのは、自然の恵みがあるということ、それから地域における様々な歴史遺産や文化遺産があるということ。それからそこに必ず人が集まる多様な暮らし方があったりするわけです。そういうものを括るキーワードは、文化という言葉ではないかと思うのです。そうすると、その九州の文化に対して、どういうイメージをつくり上げるのか、というところが我々にとって大きな問題だろうと思うのですが、それが今の切り口での整理ですと強調が足りないのかなと感じます。つまり、これまでの地域づくりというのは、経済中心だったと思えます。経済的にいかに自立できるか、経済的にいかに豊かになるかという状況だったと思うのです。これから先は、文化を重視した地域づくり、文化を重視した都市づくりであるというふうと考えられると思います。その辺でいえば、文化に対する切り口が、やや散りばめ過ぎたかなという印象は持ちました。

【玉川委員】 第2節の三層と、アジアについては順当だろうなと思います。自立すると

いうときに、例えば九州を景観が美しい、あるいは環境を大切にしているというようなガーデンアイランド九州というコンセプトを出し、開発計画をするときは必ず景観の意識、全体として美しい九州をつくるという方針を持つというのが一つあります。

もう一つは地域が衰退する中で、その地域に誇りを持つ。経済的、あるいは安全・安心ということと同時に、この地域に住むこと、山間僻地に住むこと、そこに暮らすことの誇りを持たせることを、伝統文化その他をきちんと考えてやるということが2点目になると思います。その意味では、近代化遺産・産業遺産は九州中にあります。九州が日本の近代化の運転手の役割をしたわけで、こうした近代化遺産を例えば九州丸ごと博物館というようなイメージで捉える。近代化遺産は長崎や北九州、鹿児島の上野館など、明治以来のいろんなものがあり、これを例えば第1節に、地域の文化、あるいは歴史を大切にしたい、丸ごと博物館だというような、キャッチはもう少し考えなければいけないけれども、はっきり記載するべきかと思います。

それから私は小川先生のレポートの九州協働体も大変気に入っていて、おそらくこれがいちばん重要なことだろうと思います。第2節の7番目と、それから第1節に、九州人は一緒に、全ての九州人が一緒に働いて、この圏域をいいものにするんだというその意識、この一つは文化的な丸ごと博物館というような、美しい九州をつくるという景観自然を大切にしたい、そういう美しい島を考える。そしてもう一つは小川先生の協働、九州協働体的な意識。この3つを第1節、あるいはここへある程度まとめて出すのがいいのではないかという感想を持ちます。

また最近、九州のあちこちで直方市レベルの都市が中心市街地の活性化に悪戦苦闘していますが、どうしても関心が中心部に集まり過ぎて、ここにある連携の意識、つまり周辺地域にどう役立つとか、医療、介護、アミューズメント、そういう連携というところを、強く打ち出していく。協働体と連携が、新しいコンセプトとして強調されることがいいのではないかとの感想を持ちました。

【小川委員】九州の地域的なイメージがここでは三層構造という表現になっていますけれども、これは層というと縦系列というイメージになりますが、我々の議論では必ずしもそういう系列的に考えているわけではなくて、むしろ逆にして、基礎生活圏みたいなところでこんなまとまりというかたちでの自立ができあがって、それをまたまとめたようなかたちで、もう少し広域的に、さらに戦略的に九州全体をまとめるというような意味合いでの役割を担っていくという意味で、書き方も逆にしてはどうかというような向きもあったところです。

そういう意味で、書き方としては広いところからもう少し狭いところへという流れになっているのですが、やはり単独の、既存の枠組みだけではどうしてもうまくいかないというところが目についてきたので、ネットワークを深めたり、相互の機能連携を高めたりして、お互いの連携や自立に向けての力を発揮しようというのが、今回の戦略ということに

なっているのだらうと思います。

そういう意味では、かなりできあがってきているとは思いますが、他の地域との違い、特徴でいうと、三層構造と言われているような戦略で考えてみても、やはりまだ地方中心都市というレベルのほうに力が入っているような感じがします。中国圏では、その下のところを考えなければならない。特に實際上、集落が消えようとしているところがあり、そういったところを、いくつかの集落をまとめて支援するような仕組みを、ブロックとしても考えないと持たないだらうというような議論をしています。九州のイメージからいうと、もっと小さいところをターゲットにしなければならない。九州の場合には、まだそこまでには届かなかったというか、そういうようなところまで触らないでもいいという立場の人もおられまして、その点で広域的になっているところがあります。そういう意味では、少し広がりがあるし、逆に言えば描きやすいのでしょけれども、生活や文化というところから少しレベルを上げるに従って、経済性のイメージが強くなって、先ほどのフロントランナーのようなところになると、やはり産業というイメージが非常に強くなっていきます。けれども、国土形成を考えた場合に、今までのいわゆる開発という発想を変えて、国土開発ではなく、形成だと言ったときには、単なる経済開発ではないイメージを、どう盛り込むかが最後の味付けが必要ではないかなと思っています。そういう点では、先ほどからお話が出ておりますような、環境や文化といった味付けは、これからの非常に大きな課題になるだらうと思います。

特に産業のところをつくづく思うのですけれども、ヒーリング産業という言葉も、それはそれでいいと思うのですが、例えばもう隣の韓国の済州島では、かなり大がかりに医療ツーリズムという概念で、今までは産業とも捉えられていない医療とツーリズムを結びつけて、一大拠点をつくって国際的にヒーリングや治療を求める人、それから医療開発を進めるような人たちの人的交流を図る拠点をつくろうという構想を打ち出しています。その辺りの動きをにらんで、やはり九州が一体となって、この少子高齢化という動きの中、人口減少も非常に厳しいけれども、単なる産業ではなく文化的メッセージを、国際的な意味で盛り込んだ産業イメージにしたほうがいいのではないかという感じがしています。

いずれにしても、最終的には環境の問題、少子高齢化対策、あるいは人口減少対策、それから文化といったところは、最後の味付けのところでもう一段揉んでみたらいいのではないかということが一つ。

それから、それを進める上で、これも自立の小委員会でも非常に大きな課題だったのですが、「九州らしさ」の一つは、新たな公という枠組みだけで見るのではなくて、まだまだ伝統的なものが非常に強く残っているので、伝統的に村の結束があるようなところは、それを損なわないように、もっと大事にしたほうがいいのではないかという主張が非常に強くあったものですから、そのあたりを配慮しました。しかし、新たな公の可能性は、そういうものと対立するわけではありませんので、そうした既存の村のまとまりといったものの他にも、ソーシャルキャピタルと言われるような信頼関係を新たに結び直して取り組もう

という動きがありますので、そういったものをもっと広げていくというようなイメージが、ここでは論議されているわけです。

そういう意味での人の関係性のあり方については、九州はアジアとまさに日常的な中で行き来があって、そういう関係性が結ばれ始めているということも、どこかに載せておいたほうがいいのではないかという感じがいたしました。以上です。

【矢田委員長】 外井座長と鳥丸委員、コメントがありましたらどうぞ。

【外井座長】 私どものほうでも経済活力、経済社会の問題だけを取り扱ってりましたが、文化、あるいは先ほど小川先生のお話にあった医療といったものを含めた産業を考えたいかなければならないのかなとの感想を持ったところです。

【鳥丸委員】 全体像がどうなっているのか知りたくて、参加させていただきましたが、文化についてのお話がたくさん出まして、文化の経済化、文化の産業化、あるいは産業そのものが文化になっていくという、このあたりについては、活力の小委員会でも意見が出たのですけれども、押しが弱かったのかなという感じを持っております。

もう一つ濟州島での医療ツーリズム構想のお話も出ましたが、例えば鹿児島県の指宿あたりですと、メディポリス構想というのがあって、世界的な心臓医療の先端地としつつ、そこに観光客を呼んでいこうというような動きもありますので、このあたりは活力の小委員会からは、強くは出てこなかったのですけれども、やはり医療とツーリズムなど、多様な組み合わせができていくと、地域間の連携、産業間の連携、業種間の連携で深みが出たものになっていくのではないかと思います。それが自立なのか、孤立なのかということ考えたときに、孤立しているみたいだけれど、実は全体としては自立していくという話に繋がっていくのではないかという感想を持ちました。

【矢田委員長】 今までの話で事務局からコメントございましたらどうぞ。

【事務局】 たくさんのご意見、ありがとうございます。やはり文化に対する記述が弱いのではないかとこともございますので、事務局のほうで若干考えてみたいと思っておりますが、いかんせん今後のスケジュールが非常に厳しくなっており、この原案をつくります協議会等に諮る必要もございますので、本文の記述の中に、できるだけ書き込みをしていきたいと考えております。構成として柱立てを変えていくかどうかというご意見について、再度ご確認させていただければと思っております。本日のご議論につきましては、小委員会のほうで出ていたご議論もございます。例えば、文化をもっと取り上げる必要があるのではないかとことごとございませう。九州圏の形成で、いきなり産業というのではなくて、どういう交流を広げていくのかということからまず考えていこうといったこと。

それからもう少し狭い範囲で、それぞれ文化を考えていくということで出していますが、すこし散らばってしまっている。あるいは地域資源という言葉の中に埋没しているかなと反省しております。文化については、かなり書き込んだつもりなのですが、さらにはっきり見えるようにさせていただけたらと思っております。それから自立の意味がどういうものかという話がございました。それにつきましても、それぞれの3つの層の位置づけにつきまして、当然文章の中で説明しなければいけないわけでございますので、対応をさせていただきたいと思っております。

それから、進め方のお話の中で、協働体の話、連携の話がございました。それについても小委員会でも出ておりまして、例えば人材を表に出して書いているところですけども、狭い範囲になっている可能性もございます。それから大きな話として、連携や協働体の話をもう少し書き込んだほうがいいのではないかということにつきましては、実はこの計画をどうやって推進していくのだということとも密接に関連がございますので、その辺りで書きこむことが考えられます。そういったかたちで対応させていただければというふうに思っております。

【矢田委員長】 私からも少し感想ですが、文化については今おっしゃられたように、かなり重視して、3つの小委員会の中で検討しましたが、まとめて入れるところがなかったこともあり、結果的にそれぞれの領域のところに少しずつ入って、インパクトが弱くなったと反省しています。

荒牧委員の言われたところはポイントですが、全国計画の最後のところに、全国計画の中の広域計画をどうするか、それぞれの広域が国土の中でどういう位置づけがあり、どういう責任があるかということを書くところがあります。それはある面では国境問題、環境問題に対する九州の責任があると思います。食糧の問題については、九州圏土の日本における位置づけと責任の中に書き込めるのかなと思っています。炭酸ガス何パーセントは別にして、森林の話と、循環構造としてのリサイクルの話から、定性的に書き込めるという感じがしています。

それから自立につきましては、いわゆる行財政の自立みたいな話になっていくと、なかなか議論しにくい。私としてはそれぞれのレベルにおける経済、社会、文化活動における基本的に必要機能のワンセット整備というイメージがあります。これでいくと九州は意思決定のレベルまで入らざるを得ないのかなと思うのですが、都市自然交流圏における基幹・拠点都市と多自然居住地域の機能と、これらの機能をきちんとそれぞれに整備していくというのが、特に二層、三層における自立のイメージと考えて頂けないかというところがあります。基礎生活圏における自立と、九州全体の自立と、日本国家の自立は、かなり違ったレベルの話なのですが、日常世界における不便がないような機能を充実していくというつもりで書いております。従って、自給率がブロック圏でどこまで必要かというのは、常に問われていますので、あまり力まないほうがいいのかと思います。ただ、国際交流

機能の整備や、特に本社・支社機能における分社型、分工場型が非常に大きい場合、やはりその辺りは触れざるを得ないところがあります。

それから、推進体制につきましては、今度の法律そのものが評価を受けるということになっています。ということは、結果のデータの整理や、常に推進チェック機関があるということになると、協議会というのは残るのだと思います。そこはこれからの国の考え方とも係るのがかと思えます。後は地域戦略会議や知事会、支分部局長会議といういくつかの実在するものがありますので、そういうものをどう全体的にまとめていくかというところで、計画の権限の枠の中で書き込めるものは書き込んだほうが良いと思います。

もともと全総に推進体制はあったかというところですが、国土庁が計画をつくって、各省庁がプロジェクトを盛り込んで、予算付けし、結果的にそれぞれのプロジェクトが動くので、全体をモニタリングしてここが弱いという機構はなかったのです。財務省も、全総に書いてあるからということで予算要求に対応するなど、今回はそれではまずいということで、その進捗状況をまとめてモニタリングしながら、また見直しをする。この事務局は予算がないので、やんわりとまとめなくてはいけないという感じは持っています。

小川委員は中国地方では限界集落までかなり踏み込んでいるということ、榑木委員は第二層に吸収してもいいのではないかという、両極端のご意見がありました。自立をめぐる非常に豊かな議論がありましたが、いわゆる基礎生活圏のあり方については、限界集落に限定しないで、医療のあり方や消防のあり方、インフラの整備のあり方、家族構成のあり方、産業のあり方等、全部入っているので、そこはそれでと思います。

それからやはり水平と垂直問題というのは、誤解を受ける。2節の2のところの多極型圏土構造と地域連携軸で、全体的には一つにすることをしっかりとしながら、なおかつ次のレベルのところ目配りし、機能整備をするという、垂直、水平を意識した書き方が良いと思っています。

アイランドが全部産業になっているけれど、玉川委員のガーデンアイランドもいいのではないかというのはなかなかおもしろいです。産業に特化しすぎているので、発想を転換して文化的な話までアイランドの中に入れるというのも議論の余地があるかという感想を持っています。

【荒牧委員】 プロジェクトが出てきた瞬間に、議論がどんどん進むということはありませんが、全体像と個別との関係については、現場は常に見て議論していると思うのです。例えば福岡空港の問題とか、現実に動いている問題とこれとの関係は、いったいどうなっているのか。釜山 博多のビートルのイメージが思い浮かぶのですけれども、例えばいちばん大きな博多、福岡が、どういう動きをしているのか、これとどう関係するのかがさっぱり分からない。キーワードとしては、拠点ごとの連携と言いながら、福岡は独占体制に入ろうとしていると言えないこともないわけで、そういう議論と、今現実に起こっていることがらとが、どうもよく見えないというのがあります。ここで今議論しようと言っている

つもりはないのですが、非常にダイナミックに動いているので、プロジェクトを外して、最後につけると、時間がなくなって議論が吹っ飛んでしまうということになりそうな気がするのですが、根幹で今動いているものは、なるべく早めにやっておいたほうがよかったですのではないかと、という感想です。

【矢田委員長】 ここへ来ている方々も、ほとんど同じ気持ちだと思います。あちこちの議論を聞いていると、プロジェクトが出たら本当にエンドレスの議論です。

こういう哲学議論はまったくなくて、地図に各プロジェクトを落とし込む。これをもって広域計画だと思ってやっているところがあるようです。ここでは、わりと高度なレベル、要するにフィロソフィーをはっきりさせる。恐らく空港の話は1番、新幹線の話は2のところ、一体型地域連携をどうするかという話になると思います。その時、熟度の問題をどうするかは、局長のほうでお願いいたします。生々しい話というのは、非常にとっつきやすいようで、結局は何も出てこなかったり、締切になって出てくる場所があります。少し基本的哲学をはっきりさせるという方向としました。

【小川委員】 自立の論議で、全国の話との関係について、頭の中に置いておいていただきたいことは、それぞれのところで機能として、生活支援機能ということで考えていきますが、それができるだけワンセットで効率的に供給できるように、またそこで住んでいる人たちにとってアクセスできるようにという意味での自立が、一つの柱であることは間違いないのですが、その時にオートノミーのほうの自律の話も出てきます。それが新たな公という概念に展開していったという、全国レベルでの話があるのです。その点を踏まえておいたほうがいいのではないかと考えています。これは自立的社会の論議の中で、限界集落と言われるような問題が出てきたときも、結局、自分たちのことを自分たちで決めなければならない。ここでは将来選択という言葉でも語られていますが、そういうことを踏まえてやっていこうという意味での住民自治というところが非常に重要な意味を持っています。

こういう計画をつくっていく上でも、やはり最終的には住民自治にかけなければならないというところが基本的にはあるのですが、それは小さくすれば住民という自治でいいのですが、先ほどお話がありましたように、だんだんと層を上げていくと、自治体というものになりますし、県というところで今とまっています。道州制というのは、こことは別の論議なのですが、少なくともこういう計画をどうやって進めていくかということについてのオートノミー、自律性というのは、どこかで書き込んでおかなければならないと思います。その辺りは最後のところで協働体ということにもなるかと思いますが、ぜひ考えてみてはどうかと思っています。

【樗木委員】 九州の中に基幹都市があり、その周辺に生活中心都市があって、さらにそ

の回りにその拠点があるというような、これを多階層にするのか、水平にするのかということ、申し上げたわけですが、階層的ネットワークを考えると、農山漁村の側から見て中心都市をいかに活用するかという論議が多いと思うのです。医療サービスが受けられるようにというイメージは、その例だと思うのです。

私は、これからは拠点都市が、回りにどう役割を果たすか、拠点都市側からの責務みたいなものがあるのではないかと思うのです。そういうものを少し明確化していただいて、より自分の回りで広範囲にわたって、拠点都市なり中心都市が果たすサービスがある程度見えてくる。それが30分や60分圏構想と言っているのですけれども、その境目をどこにするかということと大いに関係していて、そのネットワークができあがることで、いちばん上の地域ネットワーク、九州全体のネットワークが構成されるという意味では、これまでの論議が周辺から拠点都市を利用するという概念のほうが強かったものを、逆に考えていただけないかというのが一つ言いたいところです。両方が相互に連携して、結果的には両方とも考えますというのがいちばん優等生的な結論だとは思いますが。

それから離島・半島、中山間地域の項があって、全体を連ねる生活イノベーションの展開のことを書いていただいて、次に離島を書いていただいています。九州の中は離島もたくさんあって、これは大事でやらなければいけないわけですが、併せてやはり限界集落みたいな中山間地域の課題は深刻だと思うのです。そうすると、中山間地域の問題は離島とはまたずいぶん違った性格を持っているわけですので、そういう意味では3が欲しい。これは見た感じで申し上げているだけです。場合によっては自然に戻さなければいけない集落も、私はあり得ると思いますのでそういうことを込みにして、3を追加してほしいという注文をつけておきます。

【片岡委員】 道州制との関係で、この辺が連動しなくてはいけないのか、していいのか、あるいは選択的にされているのでしょうか。

それから、中山間地域と離島問題は私も大変関心があります。今、都市からの発想もあるというお話がありました。優先順位として都市機能や生活圏機能を離島や中山間地域に持っていけるような機能がないのかと。逆にそこから構築していくという発想があると考えました。これは、もうプロジェクトの段階になるかもしれませんが、そういう感じがしました。以上です。

【玉川委員】 第2節の1にフロントランナーとして発展する九州ということがある。フロントランナーというイメージが重要で、国際競争力をつける、あるいはレベルの高い都市なり港湾、空港整備がでてくるのですが、国際競争力というのは根幹にはそれがあっても、同時に、周辺の国、周辺地域との交流、そういうものの重要性、交流の意思がどこかに込められないかというふうに思います。やや新聞記者的に読むと、ものすごい競争力のあるものを、釜山に負けるな、上海に負けるなというイメージではなくて、市民間の

交流をやることもまた、フロントランナーとしての責務であるという要素をどこかに入れたいと思います。

というのは、日韓で教科書問題が燃え上がっていた頃、佐賀県立の名護屋城博物館（同県・鎖西町）を建設する構想が持ち上がった。韓国側にはこの城が秀吉の朝鮮出兵の軍事基地だったこと、博物館がそれを顕彰することになる、などを理由にものすごい反発が生まれた。しかし、佐賀県は歴史学者の相互討論、学童の交流、韓国人の学芸員の雇用、両国の教科書記述の展示など地道な「地域外交」を粘り強く積み重ねた。そして、今の博物館の内容になっていった。地域外交は交流や人と人との分厚い交流の積み重ねの中で進められるわけで、理念や国益が正面に出る国家外交とは違う可能性を持っていると私は実感しました。

フロントランナーというとき、経済交流や草の根交流の分厚い展開と積み重ね、国同士の歴史の「負の遺産」をも克服して新しい可能性を切り開くこの「地域外交力」を持つということは非常に重要なことではないか。九州ブロックは東アジアと一衣帯水という地政学的な優位性があり、歴史的、文化的にも重要な地域資源を持っているわけで、（だからこそ、東アジア文化交流をテーマとする国立博物館ができたわけで）その優位性を経済的なもの以上の「フロントランナー」たろうとするものを意識的に書き込めたらと思う。

【矢田委員長】 各圏域どこでもゲートウェイがどこかに入っています。もう一つ上に行くという意味で、フロントランナーとつけました。とはいえ国際交流のあり方もこの中にきちんと記述しなくてはいけないと考えています。

もう一つは、関門や豊予、南西諸島との連携は、8ぐらいのところに入れておかないといけないですね。同じように域際連携が6と7の間か8ぐらいで入れることが要請されている話だったと思います。

道州制は固く言うと制度的には何も関係ないので前提にはしないのですが、県境がなくなった時に、また州都中心の一極構造になる可能性が十分あるので、ベースのところは現在の県都を中心にした生活圏、経済圏をしっかりと固めてしまおうというところがあります。

それからもう一つ、基礎自治体のところ、基礎生活圏というところが、今、市町村レベルと県レベルとがありますが、その実態を実体化するというイメージがあります。文化、景観等をきっちり書きましようという話が非常に大きいですが、そのほかにもいろんなところでかなり膨らんだと思います。骨格が崩れているわけではないので、できるだけ取り入れていただければと思います。あとは事務局の方で日程その他をお願いします。

【事務局】 それでは事務局より今後のスケジュールについてご連絡させていただきます。本日の学識者懇談会を受けまして、その後、年が明けて第2回プレ協議会でキックオフレポートの審議に入っていただく予定であります。また、2月5日には各県知事、政令市長、関係地方支分部局長等が集まりまして、意見交換会を開催する予定でございます。3月に

は、第3回のプレ協議会で中間整理（案）をご議論いただきまして、プロジェクトが入っている内容で第4回目の学識者懇談会を開催させていただきたいと考えております。

その後、協議会を発足いたしまして、4月には市町村の計画提案といったスケジュールを考えております。その市町村提案を受けたかたちで、再度学識者懇談会を開催させていただきたいと考えております。最終的には7月に計画提案のとりまとめというスケジュールで想定しています。以上です。

以上